

小林 威朗 提出 学位申請論文（課程博士）

『平田国学における霊魂観の史的考察』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、「平田国学における霊魂観の史的考察」と題し、平田篤胤の学問・思想、取り分けその霊魂観に焦点を当て、その霊魂観が平田篤胤の学問を継承したと論者が見做す幕末・維新时期に活躍した主要な神道家・国学者にどのように受容され、そしてその霊魂観が明治初期の国民教化を担う国家機関である宣教使内部においていかに理解され、国民教化に資されようとしたのかについて歴史的に考察したものである。本論文は、序章と終章を含めた全十章から成っているが、内容的には大きく二部に分かれ、第一部「平田篤胤の霊魂観と神職・国学者」には、第一章「『霊能真柱』の霊魂観―宣長の継承者としての篤胤」から第四章

「六人部是香の幽冥論と気吹舎―『古史伝』の受容と『産須那社古傳抄』―」、
第二部「宣教使と平田国学の靈魂観」には、第五章「宣教使の教義確立問題と矢
野玄道の著作」から第八章「堀秀成と宣教使」までの各論考が収められている。
すなわち、本論文は、第一部として平田篤胤そのものの靈魂観とその靈魂観の影
響を色濃く受けている神職・国学者であった岡熊臣及び六人部是香の靈魂観に関
する論考、第二部として明治二年から五年にかけて設置されていた明治維新政府
の国民教化機関である宣教使における官員たちの靈魂観をめぐる思想的動向を分
析した論考から構成されている。

第一部の第一章『『靈能真柱』の靈魂観―宣長の継承者としての篤胤』では、
篤胤の靈魂観の主著ともいえるべき『靈能真柱』を分析し、篤胤が本居宣長の「現
世に影響を与えるミタマ」と「夜見に往くミタマ」という考えを一旦受容し、
「靈」「魂」の語を当てて使い分けを試みていたことを示し、その上で「夜見」
ではなく「幽冥」という地上に存在する見えない世界に「魂の行方」を定め、

「霊」「魂」が共に地上に存在することを説くことによって、「霊魂」の不滅を導いていると論じている。

第二章「草稿本『古史伝』における篤胤の思想形成過程―神観・靈魂観と「青人草」―」では、篤胤の主著である『古史伝』の成立過程を再検討するための基礎的作業として、従来本格的に検討されたことがなかった草稿本に焦点を当て、草稿本から窺える篤胤の靈魂観を中心とする思想の形成過程を考察し、篤胤は産霊神の「御神徳」を「持分け」た神々によって世界・万物が生成され、人間もまた産霊神から「神魂」を授かるという神人関係・世界観を有していたと論じている。第三章「神職・国学者岡熊臣の靈魂観形成過程に関する一考察」では、近世後期の津和野藩における代表的な国学者であり神職でもあった岡熊臣による神葬祭普及運動の理論的根拠となった靈魂観を扱い、岡熊臣の著作である『霊の梁』と篤胤の『霊能真柱』との比較を試み、その分析の結果、熊臣は宣長の古事記理解から「神代と現在の連続性」と「神の御霊と人の靈魂の相似性」を、篤胤の

『靈能真柱』からは「人の靈魂實在の普遍性」を受容したと結論づけている。

第四章「六人部是香の幽冥論と気吹舎―『古史伝』の受容と『産須那社古傳抄』―」では、篤胤の京都における高弟であり、向日社の神職であった六人部是香の『古史伝』の受容過程を分析しつつ、是香の靈魂觀・幽冥觀を代表する『産須那社古傳抄』との比較が試みられており、多くの共通点とともに、また大きな違いも見出されると述べる。すなわち、「現世の守護」と「没後の使令」という発想は両者に共通するが、『古史伝』では大国主神に、『産須那社古傳抄』では「産須那神」にその職掌が付与されていることの相違の重要性を指摘している。そして、その相違の要因としては、篤胤の『古史伝』が大国主神の事蹟のように辛苦に遭ってもくじけることなく徳行を積むという、謂わば人間にとっての生き方が主たる内容であったのに対し、『産須那社古傳抄』では、神職としての是香の立場から「産須那神」と「産須那社」の重要性が主に説かれているために、いかに「心を竭^{ツク}す」かという人間（氏子）の崇敬・信心が主たる問題とされている

からであろうと分析している。

第二部「宣教使と平田国学の靈魂観」の第五章「宣教使の教義確立問題と矢野玄道」では、宣教使期の教義確立問題について、幕末維新期の平田派国学者の中心的人物であった矢野玄道の著作『真木柱』に焦点を当て、「神魂帰着」に関する議論が平田延胤等と小野述信という神祇官・宣教使上層部を対立軸として主要な論争となっていたことを示し、宣教使内部では『古史伝』流の古伝解釈を基調とする靈魂観が主流として採用されていたことを明らかにしている。そして、この議論における延胤擁護のために執筆されたのが矢野の『真木柱』であったことを指摘し、宣教使における教義をめぐる様々な問題が宣教使の教官等によって議論・決定されていく過程を分析している。また、靈魂観とも密接に関連する平田国学の重要な思想・観念である世界観についても言及し、平田派内部における所謂「豫美国論争」論争が、靈魂観をすでに決定していた宣教使において、平田流の世界観が採用されるかどうかという意味において重要な論争であったこ

とを紹介している。

第六章「宣教使対宣教師―伊能穎則とジョージ・エンソル―」では、伊能穎則の思想・学問を概観した上で、伊能穎則とイギリス人宣教師ジョージ・エンソルとの間で交わされた神観に関する議論が分析されている。エンソルの著書『神道破斥』は、『古事記』及び『日本書紀』に対する信憑性をめぐる議論や全知全能という神観に関するものが多くを占めており、著作中に登場する神道者を批判しながらキリスト教の優位性を示す著作であるが、論者はこれに対する穎則の反論を取り上げ、詳細に分析を加えている。すなわち、伊能穎則は、記紀の信憑性については、天体説（地動説）受容や、近世期以来の記紀研究を基とした儒者との論争、さらに御一新という現実を裏付ける「天壤無窮」の神勅（古伝）によって論証していること、また「全知全能」という神観については、天之御中主神の分魂と神々の分掌という神観に天地初発から「顕」と「幽」を考える独特の幽顕論によってこの国の神のあり方を示していること、などを述べてエンソルの批判に

応えていることを明らかにしている

第七章「久保季茲の靈魂観―平田国学との関係を中心に―」では、宣教使官員を経て後に神道事務局生徒寮や皇典講究所などで教鞭を執った久保季茲の靈魂観について検討を加え、従来、一般的には平田派国学者としては扱われないで、謂わば「独立派国学」の重鎮と目されてきた久保季茲の略歴や思想・学問内容を分析し、安政期に妹のてふが平田家に嫁いだことにより気吹舎への出入りが始まり、慶応年間には延胤を学問的に補佐するまでになった事実を明らかにしている。さらに、明治維新後の久保季茲の活動にも触れ、明治二年頃の教導局では古典から「教の大方」を示すよう命ぜられたこと、あるいは、教導局での久保の靈魂観・幽冥観には『古史伝』の内容が反映されていること、などを指摘している。また、宣教使期の明治四年における論争では『古史伝』の内容から抽出される「神教」をもって教導することを主張していたことや、教導職期の『神教叢語』では、篤胤の靈魂観を引き受けながらも、行法（鎮魂）の重要性を説いてい

た事実などを紹介している。

第八章「堀秀成と宣教使」では、近世後期における堀秀成の学統意識を示した上で、宣教使における活動が扱われている。論者は、秀成は富樫広蔭から学んだ音義説の影響を強く受けており、この方法によって古事記を解釈していることを明らかにし、これは宣長が不可知としていたことを知ろうとする、という目的において平田の学問と同質でありながら、その方法を異にするものであった、と指摘する。そして、このような国学者をも採用して民衆教化にあたったのが宣教使であり、教義確立が難航したのはむしろ当然のことであったが、強引にであれ教義を確立し宣教使を船出させたところに「平田国学」の成果があったのでは、との興味深い指摘も成している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近世後期から明治初期における神葬祭の普及運動の理論的実践的根拠となった平田篤胤の霊魂観の形成過程のみならず、その霊魂観が後世の神道家・国学者に与えた影響を豊富な原資料を駆使して歴史的に考察したものであり、第一部「平田篤胤の霊魂観と神職・国学者」（第一章から第四章）及び第二部「宣教使と平田国学の霊魂観」（第五章から第八章）というように、大きく二部に分かれてはいるが、いずれの章も平田篤胤に淵源する霊魂観を中軸に据えて「平田国学の霊魂観」の歴史的継承・展開に則した論考である。すなわち、平田篤胤の霊魂観を分析し、その歴史的定位を明らかにするとともに、その霊魂観が幕末維新期の国学者にいかにして批判的に受容され、新たな展開を齎したかを追究した論文である。

本論文の総体的な特色は、国立歴史民俗博物館所蔵の平田篤胤関係資料をはじ

めとする数多くの原資料を駆使して平田篤胤及びその思想的実践的後継者と論者が目する多彩な国学者の靈魂觀を軸に、所謂平田派国学の神觀・靈魂觀あるいは世界觀を総合的体系的かつ史的に分析・考察したことにある。取り分け、明治維新後の国家の神道教化政策を理論的実践的に担った宣教使の神道教義がいかにして形成されようとしたのかについて、前記平田篤胤関係資料にある気吹舎日記や書簡などを用いて宣教使における官員の活動実態をより詳細に浮き彫りにした点は大いに評価出来よう。また、宣教使の主要な目的であるキリスト教からの防衛という観点から、宣教使官員であった伊能穎則の対キリスト教觀を検討するなどして、平田国学は全知全能の神に対抗しうる論理を用意するために一定の役割を担ったと結論付けている点も説得力がある。

周知のように、藤井貞文の先駆的な業績に代表されるこれまでの宣教使活動に関する研究の多くは、明治初年の宣教使活動は不振のまま終焉し、そのために教部省へと改組されて新たな神仏合同の国民教化政策へと転換したとして、宣教使

内部の靈魂觀や幽冥觀については具体的詳細に論じられていなかった。こうした従来の研究動向に対し論者は、宣教使設置期間中の平田国学の牙城であった気吹舎内での同門宣教使官員のそれぞれの思想を丹念に検証し、宣教使における同門の数の多さから考えれば、教義確立の問題は容易に決着がつくものと思われがちであるが、実際には門人達が有する「古伝」解釈は各人各様であり、統一の見解を示すには様々な困難が生じていたことを明らかにしている。無論、従来の研究においてもこの点に全く触れられていなかったという訳ではないが、当時宣教使の中枢にいた平田延胤の書簡等を用いて宣教使に係する平田門人たちの動向を具体的に提示している点は本論文を一貫する手法として高く評価されよう。

一般的にいつて、同門である国学者の各々が思想的にも実践的にも全くの一枚岩である必要はなく、むしろ真淵・宣長以来の「師説に泥まず」という近世国学の伝統が齎したものであると考えるならば、論者がいうように宣教使における平田派国学者たちの靈魂觀・幽冥觀等が異なっていたとしても別段不思議ではな

く、論者の指摘も一見するところ平凡である。だが、論者によれば、「師説に泥まず」といった近世国学の伝統が宣教使における様々な異説を齎したと理解するだけでは不十分であり、その背景・要因としてより重視すべき点は、平田篤胤の学問・思想の有する古典研究の結果として導き出された「古伝への信仰」こそが、平田篤胤の思想を継承する国学者の多様な神観・霊魂観を生みだしたことがある、というのである。本論文の骨子・中核はこの指摘にあると言っても過言ではなく、問題はその指摘の妥当性がいかに論証されているかであろう。論者は、この指摘の妥当性を本論文の各論考において検証しようとしているのであるが、結論的に言うならば、本論文におけるその検証の結果は概ね肯定出来ると思慮する。

ところで、論者がいう平田篤胤の「古伝への信仰」の結実が、主著である『古史伝』及び『靈能真柱』であることはいままでもないことであり、平田篤胤及びその後継者たちの霊魂観・幽冥観・世界観を論じるためには必須の著作であり、

論者も引用している、古くは村岡典嗣、近くは子安宣邦に注目すべき所論がある。それゆえ、論者も第一章「『靈能真柱』の靈魂觀―宣長の継承者としての篤胤」及び第二章「草稿本『古史伝』における篤胤の思想形成過程―神觀・靈魂觀と「青人草」―」でこの両書を扱っているのも当然であるが、本論文でのこの二つの論考には従来の研究には見られない独創的な手法と見解が少なからず示されており、本論文の価値を高めている。例えば、村岡典嗣以来指摘されている篤胤と本居宣長の思想的継承関係を靈魂觀に焦点を絞って考察し、篤胤の靈魂觀が宣長のそれとは異なる独自のものであるといった理解に疑問を呈して、論者なりの解釈を施していることなどである。例えば、本居宣長の「現世におけるミタマ」と「夜見に往くミタマ」に影響を受けた篤胤が一旦は「靈」と「魂」の語の使い分けを試みたからこそ、「幽冥」に「魂の行方」があることを発見し、魂は「夜見」ではなく「幽冥」という地上に存在する見えない世界に「魂の行方」を定め、「靈」「魂」が共に地上に存在することを説くことによって、「靈魂」の不滅を導

いたことを明らかにしていることなどである。従来「霊」と「魂」は一括して「霊魂」とされていたことを『靈能真柱』を緻密に点検することによって、篤胤が一時的であれ「霊」と「魂」を宣長の影響によって区別していたとの指摘は篤胤の学問・思想を考える上でも大いに参考になるものと評価出来よう。但し、その掘り下げが十分とは言い難いことも事実であり、それは、論者のいう篤胤が「発見」したとされる「霊の行方」としての「幽冥」に関する十分なる考察が不十分であることに起因するものである。平田篤胤の古典研究を扱う以上、論者自らも『古事記』は勿論のこと、「幽冥」に係る『日本書紀』の該当部分に関する古今の解釈を熟読・吟味する姿勢が是非とも必要であろう。

さらに、第二章「草稿本『古史伝』における篤胤の思想形成過程―神観・霊魂観と「青人草」―」においても、篤胤の主著である『古史伝』の成立過程を再検討するための基礎的作業として、従来本格的に検討されたことがなかった秋田県公文書館所蔵の『古史伝』草稿本に焦点を当て、草稿本から窺える篤胤の霊魂観

を中心とする思想の形成過程を考察し、産霊神の「御神徳」を「持分け」た神々によって世界・万物が生成され、人間（青人草）もまた産霊神から「神魂」を授かるという篤胤の神観念・人間観を端的に提示している点なども評価出来る。とは言うものの、篤胤の霊魂観（来世観）の前提となるとする「青人草」に関する言及は僅かであり、篤胤が重視した「鎮火祭祀詞」との関係に関しても必要最小限の分析は不可欠であろう。

以上述べたように、本論文を一貫する特色は、平田篤胤の霊魂観を主軸とする思想・学問の継承・展開を可能な限り原資料を用いて、その資料をして「平田国学における霊魂観」の系譜を俯瞰することにある。次いで本論文で評価出来る点は、論者自身が一神職として自己の「古伝への信仰」をより強固なものとするべく、平田篤胤の霊魂観とその継承者の思想を扱っている点である。そのことは本論文の序章からも窺えるのであり、事実、第三章で岡熊臣、第四章で六人部是香の霊魂観が検討されているのもこの故であろう。神葬祭普及運動をはじめとする

氏子への教化運動の実践と理論武装を最も精力的に実行したのが岡熊臣と六人部是香であったことに大方の異論はないであろうし、単なる研究のための研究ではない、自己の課題・目的を秘めた研究であることにも本論文の特色・価値があると言えよう。神道家・神職の先達としての国学者の靈魂観・幽冥観を主軸に、個別の人物や宣教使といった国家の国民教化機関の構成員の思想的実践的活動を精緻に史的に検討・分析してゐる本論文は神道神学の一分野である歴史神学にも大いに参考になるものと評価出来る。

他にも、本論文には特色ある視点が少なからずあるが、第七章「久保季茲の靈魂観―平田国学との関係を中心に―」で久保季茲、第八章「堀秀成と宣教使」で堀秀成、といった従来の国学研究では「平田国学」との関係が積極的に論じられてこなかった人物の靈魂観を中心とする学問・思想を分析し、「平田国学」との影響関係を検討したことも本論文の特色であろう。久保と堀のいずれもが宣教使に所属していた国学者であることに着目し、組織としての宣教使の統一的教義確

立という制約下でいかに活動したのかを本格的に浮き彫りにした論考であり、人物研究の面だけでなく、宣教使という組織そのものの実態を明らかにする意味からも重要な業績と言えるよう。

以上、本論文に見られる幾つかの特色について述べてきたが、無論、問題点や残された課題も多々ある。本論文における最も重大な問題点は、「平田国学の靈魂観」の基本である平田篤胤自身の靈魂観の検討・分析が質量ともに不足していることである。無論、本論文は平田篤胤に限定した靈魂観を扱ったものではないことは理解出来るが、せめて可能な限り第一章と第二章が有機的に繋がるような内容と体裁に纏める努力は必要であったろう。また、原資料を駆使した研究手法が本論文の特色であることは十分認めるが、その前提として版本を含む刊行文献や先行研究の熟読・吟味が必要不可欠であることは言うまでもない。その点において、本論文に缺けるところなしや、少しく疑問が残るのも事実である。尤も、以上述べたことを含む本論文の様々な問題点や課題については、論者への学力確

認に際しても取り上げられたことであり、論者も十分に認識しているところである。今後の更なる研鑽は十分に期待出来ることを附言しておく。

以上、本論文は、平田篤胤そのものの霊魂観についての踏み込んだ分析に少しく欠けるところはあるものの、「平田国学」の霊魂観に焦点を絞り込み、その幕末維新时期における継承・展開過程を体系的・時系列的に論じた本格的な研究であることは疑いない。よって、本論文の提出者小林威朗は、博士（神道学）の学位を授与せられる資格があるものと認める。

平成二十七年二月十四日

主査 國學院大學教授 阪本 是丸 ①

副査 國學院大學教授 武田 秀章 ①

副査 國學院大學准教授 遠藤 潤 ①

小林 威朗 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士（神道学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成二十六年十二月十七日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	阪本是丸	印
副査	國學院大學教授	武田秀章	印
副査	國學院大學准教授	遠藤潤	印